2026年度　中部学院大学・中部学院大学短期大学部

# キリスト教研修会



## 講演記念感想文集

講　師：樋野　興夫　先生
順天堂大学名誉教授／新渡戸稲造記念センター長

講演テーマ：「がん哲学外来へようこそ」
－偉大な先人たちの金言を紡いで患者さんを支える－

主催：中部学院大学・中部学院大学短期大学部　宗教委員会
共催：一般社団法人オリーブビーイング／岐阜・生と死を考える会

# はじめに

岐 阜 済 美 学 院
宗教総主事　高木 総平

私は 10 年前に以前にいた教会に樋野先生をお呼びし、その時から先生からのメールやそのご著書からずっと教えられてきました。これまでも肉親や知人、教会の関係者、多くのがんにかかった人たちとの交流がありました。また、この大学関係の中にもかつてかかった方、現在治療中の方がいることも知っていました。そのような中で、今年のキリスト教研修会は、ぜひ樋野先生に来ていただき、がんの患者さんへの支援についてのお話を聴くとともに、その根底にあるキリスト教への理解を深めることを願い、それが実現した次第です。

今回、本学にお越しいただき、改めて先生からとても深い、意義ある感化を受けました。特に今回はこのような内容ですから、岐阜市においてがんの患者さんを支援している「オリーブ・ビーイング」（代表：柴橋有美さん）と「岐阜生と死を考える会」（代表：古川秀昭さん）にも共催していただき、その関係の皆さんの参加を得ることができました。

また、看護学科二年生と人間福祉学科一年生の一部の参加もありました。

講演会後に先生と話をしていましたら、「講演会を聴いての記念誌（感想文集）を作ったら」と、お話しをいただきました。樋野先生にとっても、学生から地域の方々まで多くの多様な参加者だったので強く心を動かされたようです。それと講演を振り返ることにより、この地域で「がん哲学」の活動が動き出す契機になればとの願いがあると理解しました。

今回は、本学のホームページ上に「文集」として載せることにしました。ご講演を聴いてそれぞれに受け止めておられます。お読みいただければ幸いです。

2026 年度キリスト教研修会

# 講　演

## テーマ：「がん哲学外来へようこそ」

－偉大な先人たちの金言を紡いで患者さんを支える－

開催日：2026 年 7 月 14 日（火）

講　師：樋 野　興 夫

順天堂大学名誉教授／
新渡戸稲造記念センター長

※この文書は当日の樋野先生のご講演の録音を文字起こししたものです。
録音状態の関係で一部割愛した箇所はございますが、スライドを交えてお話しいただいた内容はすべて網羅しております。樋野先生にも内容をご確認済みです。
当日ご参加された方には、当時の様子を思い出していただけるかと存じます。万が一、ご不参加の方がこちらをご覧になり、理解しにくい箇所がございましたら、ぜひ樋野先生のご著書をご一読いただくことをお勧めいたします。

【講 演 記 録】

# 「がん哲学外来へようこそ」

種を蒔く人になりなりなさい。からし種のたとえ、からし種、どんな種よりも小さいですが、成長すると、どの野菜よりも大きくなり、空の鳥が木の枝に巣を作るほどの木になります。これは「時代を超えて、時代を愛する」『がん哲学』『がん哲学外来』の原点である。『21 世紀の医療のとびらを開く』という本のテーマです。

希望を持っている人を誰が病人と呼ぶでしょうか。東京のお茶の水では、毎月、こういう会を開いて、そして『教会でもがん哲外来』を始めようと、『お寺でもがん哲外来』を始めようという動きがあります。みなさん、僕の話は、『スルメ症候群』一度聞いてもわかんない。2 度聞いても 3 度聞いて首をかしげ、4 度聞いて頷き、あースルメ症候群、あースルメ症候群。わけがわかんないのがいい。今日、僕の話を最初に聞いている人は、何言ってるか、わかんないですからね。

『人生を変える 言葉の処方箋』という本を出したね。これはロンドン大学で講演した。ロンドン大学でも当時のデス・カフェの提唱者の話を聞いた。

北京大学で、『がん哲学』の講演会をやった。これは台湾でも訳された。英語、ベトナム語の訳も出され、韓国語の本も 2 冊出した。

『病気は人生の夏休み―がん患者を勇気づける 80 の言葉』、『明日この世を去るとしても、今日の花に水をあげなさい』という本を出した。
『病気であっても病人ではない社会』を作る。『解決できなくても、解消できればいい。』

僕は島根県で生まれましたけど、島根県ってどこにあるか知ってますか？東京の学生は島根県と鳥取県がわかっていない。島根県の学生に埼玉県、栃木県、群馬県がどこにあるか分からない。同じだね。

30 名の人口、60%が空き家。無医村、こういうところで生まれたということでね。いつも僕が一人で石投げをするとね、30 メートルぐらい後ろから、いつも僕の背中を老人が様子を見ている。1 メートル後ろだったら何かしゃべるから。30 メートルくらいだったら何もしゃべらない。そっと見守ってくれるのがいい。

3 歳の時の私は、こう思いました。将来、医者になろう。 無医村で体が弱くて、いつも隣の村の診療所に母親が連れてね。 峠のトンネルをその時に 3 歳にして将来、医者になろうと思ったということだね。

僕の母親が、僕の生まれる年の元旦の夢が富士山であって、僕をいつも『富士山子』として育てたということだね。

小学校、中学校は廃校になった。小学校、中学校、8 キロほど離れたところに出雲大社がある。出雲大社には「因幡の白兎」の像がね。うさぎがある島から本土に帰る道がないことに、海鮫に「数を数えてやるから一列に並べ」と言い、最後の一歩でだました。大国主の学びは『最も剛毅なる者は最も柔和なる者であり、愛ある者は勇敢なる者』である。

『高き自由の精神を持って医療に従事する。他人の苦痛に対する思いやりは、医学、医療の根本である。』島根県から「遣島使」を委嘱されている。

『少年よ、大志を抱けというボーイズビーアンビシャス。』クラークって知ってますでしょう。札幌農学校学校の教頭だったね。彼が 8 ヶ月間、日本にいて、本土を去る日に馬上から言ったのが『ボーイズビーアンビシャス。』新渡戸稲造とかね、内村鑑三は、クラークから大きな影響を受けた。新島襄、新渡戸稲造、内村鑑三の流れ、『われ 21 世紀の新渡戸とならん』という本を 2003 年に出した。新訂版と英語版を出したということで、医療というのは病院だけではないと思い、一人の人間を癒すには、一つの村が必要であることで、日本メディカル・ビレッジ学会を立ち上げ、 病院が無いところは、『メディカル・ビレッジ』で毎年学会をやっている。

いつかここで学会を主催してほしいね。主催ね。さっき言ったけどもね。『がん哲学外来市民学会』『日本メディカル・ビレッジ学会』『日本地域医療連携システム学会』を毎年やっているというということだね。今度は、哲学外来、市民学会は名古屋でやられるということで、 皆さんもこういう学会を企画してくださるといいね。

あるがん患者が、入院中に本を読んで、一行引いてね。そして、リハビリを兼ねて散歩して写真を撮ってね。亡くなって、ご主人が「カルタ」を作ってくれたということだね。『病気は人生の夏休み』という、病気であったから、ご遺族はできたということだね。

がん哲学という本を出して、病理学には限りないことをよく知っていて、新しいことにも、自分の知らないことにも謙虚で常に前に向かって努力している。

1919 年、パリで講和会議が開かれた時、スペイン風邪が猛威をふるい、感染者 6 億人、死者 4,000 万～5,000 万人という。その時、新渡戸稲造はパリに居て、その後、国際連盟の事務次長に就任し、トーマス・カーライルの影響を受けた新渡戸稲造は、「common sense　(社会常識を備えた柔軟性のある人格者)」と言われている。

コロナ時代の生き方が問われる現在、新渡戸稲造なら、なんと答えるのであろうか 。『やるだけのことはやって、後のことは心の中でそっと心配していればよいのではない

か。どうせ、なるようにしかならない。』これは勝海舟の言葉でね。

そして、ね、コロナ時代を生きる5箇条。『自分の力が人を役に立つと思う時は進んでやれ。』『人の欠点を指摘する要はない。』『人の過ちは語るに足らぬ。』『理由があっても腹を立てぬこそ非凡の人。』『感謝は優しき声に現れる。』『心がけにより逆境も順調とされる。』で『いい覚悟で生きる』という本を出したということだね。

『がん哲学』の新訂版は、2004年の年、新訂版は立花隆さんとの対談でね。立花さんが膀胱がんになったということだね。『電子計算機時代を宇宙時代だと言ってみても、人間の身体の出来と、その心情の動きとは、昔も今も変わっていない。超近代的で合理的と言われる人が病気になって、自分の死を考えさせられ、太古の人間にかえる。その医師に訴え、医師を見つめる目つきは、超近代的で合理的でもなくなる。 静かで、寂しく、哀れな、昔ながらの一個の人間にかえる。その時の救いは、頼りになる良医が側にいてくれることである。』

そして、『がん哲学』『人はがんとともにどのように生きていくのか、病気になると人はどのように感じて何を考えますか、家族はどのように患者さんを支えることができますか、周りの人はどのように患者さんを支えることができますか、 人の支えは患者さんにどのような効果をもたらしますか、「寄り添う」と「支える」は違う。』支えるというのは体重が重い。寄り添うというのは、横から手を差し伸べる。
「寄り添う」と「支える」は違う。 困っている人は一緒に困ってくれる人がいるとその人の悩みは解消する。「いぬのおまわりさん」だね。言葉はなくてもいい、一瞬困ってくれる人がいるとその人の悩みは解消する。解決はできなくても解消はできる。 がんから学ぶ。がん細胞から人間社会の病理を見る。

もし、愛がなければ、何をなしたとしても無意味だ、ということだね。『がん哲学外来』とは、愛がなければ全てが無意味。愛に溢れた雰囲気、静かな口調、にも関わらず、仮面を外し、垣根を、心の垣根をとる。秘密は守る、リラックスした時間を過ごす。正直になる、積極的に人々を支える。

希望、患者の個性を引き出す。個性を引き出された患者もやっぱり使命がある。

『あなたは善を行うと利己的な目的でそれをしたと言われるでしょう。気にすることなくやりとげなさい。目的に達しようとすると邪魔だてする人に出会うでしょう。気にすることなくやりとげなさい。』これがマザーテレサの言葉だね。

2001年に『がん哲学』を提唱した。文部科学省は新学習指導要領に、がん教育を明記し、 2021年から中高での授業が本格化される。大学生に授業するとね。僕の授業は半分が寝るね。小学生に授業すると一人も寝ないね。 同じスライドを使って質問もやり取りす

る。なんで、同じスライドを使うのに大学生は半分寝る。小学生は一人も寝ない。我が日本人特有だね。 アメリカの大学生に授業しても寝ないね。ビジョンとドリームが無くなると寝るよ、今後、劣化するよ。小学校の先生を呼んで授業をした。『 がん教育は、予防知識より心構えが大切。』予防知識でなく心構え、なった時の心構えがね、そして、がん学の目的は、その体に巣くったがん細胞に介入し、その人の死期を再び未確定の彼方に追いやり、死を忘却させる方法を成就すること。

適時診断と的確治療の実現である。がんの根幹を追求し、俯瞰的に物事を総合的に見られるようにすることを目的とする。まあ、我々はね、4 つのがん、遺伝性のがん、環境によるがん、これらは 5 %。あとは、遺伝と環境の相互作用。世界の動向を見つめつつ、歴史を通して、今を見通せるよう。俯瞰的にものごとを理解し、理念を持って現実に向かい、現実の中に理念を問う人材となる。複眼の思考を持ち、視野狭窄にならず、教養を深め、時代を読む「具眼の士」の種を蒔く人材になる。

我々は一個の細胞に DNA があり。その一個の細胞の DNA が大体 2 メートルぐらいになる。一人の人間の体には DNA が 1200 億キロ。太陽系は約 100 億キロだから、人間は宇宙を内包しているということだね。日本の人口出生約 70 万人。死亡する人（約 138 万人）の方が多い。これが日本の現状だね。

あるいは色々な種類、ね。男性は前立腺が 1 位、女性は乳がん 1 位。内、死者は大体、37 万人 、男性は肺がんが 1 位、女性は大腸がんが 1 位という、大体ね、2 人に 1 人ががんになる時代になってきた。がんは男性は 54%、女性は 41%、さっき 3 人に 1 人は認知症になると、どっちがいい？ がんと認知症は逆相関する。アメリカとイタリアの論文、がん患者は認知症になりにくい。認知症患者はがんになりにくい。認知症は自分はいいけれど人には迷惑。 がんは自分が苦しいけれど人には迷惑が少ない。がんの方が高尚だね。

日本の平均寿命は、今は男性は 81 歳、女性は 87 歳だね、 子供の時に愛情豊かな両親や老人に育てられた子どもは大成する。20 代、30 代、人に言われたことをがむしゃらになる。40 代になったら自分の好きなことに専念する。50 代になった人の面倒を見る。60 代になっても自分のことしか考えていなかったら恥と思え。70 代になったら自分のことを語る。80 代になったら自分の人生をプレゼントする。90 代になったら天寿を全うする。

日本人というのは、20 代、 30 代は、人に言われたことをがむしゃらにやっていないから 40 代の時も自分の好きなことが分からない。学生さんも、若い時は先生に言われたことをがむしゃらにやるんです。自分で何かをやろうと思わなくてもいい。 そして、40 代になったら、自分の好きなことがわかる。これがアメリカのやり方だね。 我々の 4 つの塩基から 3 つの塩基の配列で一つのアミノ酸を構成する。そして、一個の塩基が挿入されたり、欠失することによって、アミノ酸が変わり、タンパク質が変わる。これが突然変異だね。1 個の人の塩基を 1 人の人間に大きさに例えると、染色体は国の大きさ、遺伝子は町

の大きさに。人間が地球を動かしていく。

なんで、我々は、言葉に付加と削除をするようになりましたかね。イエス・ノーで答えれば突然変異は起こらないのに、我々は 10 のマイナス 7 乗の確率でこういう変異が起こるようになっています。なんで我々は、言葉に付加と削除をしたのかね、述べよ。知らない？

アダムとイブだね。アダムとイブがヘビの誘惑に負けて言葉に付加と削除をした。イエス・ノーで答えれば、ヘビは去っていったろうに、弁解し始めた、だから付け込まれる。そして、神はエデンの園から追放する。それは生命の実を食べないようにエデンの園から追放する。永遠に生きない。善悪を知る木の実を食べた。生命の木の実まで食べると、immortalize して、がん細胞は生命の木の実を食べたようなもの。だから immortalize して永遠に生きる。正常細胞・がん細胞、試験管の中で培養すると正常細胞は、30 回の細胞分滅で死ぬ。がんは永遠に生きる。それは、そうすることによって染色体が短くなり死ぬ。がんは染色体が短くならないような酵素を出している。だから永遠に生きる。ということだね、

1 年間で日本人は 130 万人、日本全体で 530 万人ががん患者。『がん』は怖い病気から『がんと共存する時代』になってきた。『がん』は防げない。しかし、『がん』で死なない時代だ。これは『天寿がん』だ。

まあ、手でふれるがんは約 1cm で、10 億個になる。PET-CT で分かるのは 1 億個に増えている。

発がんの三箇条は、必ず原因があって、プロセスがある。時間がかかる。禍いが起こるのは、起こる時に起こるにあらず、由って来るところ遠し。予防、治療ができる。転移にはね。解剖学的なアクセス・ルートがあるという。がん細胞は血管の中に入ってね。そして転移する。正常細胞は血管の中に入れない。形が変わって血管の中に入ってね。1 個のがん細胞は、仲間を作って、血管を流れ転移していくということだね。正常の大腸（スライド)、これは正常、これはがんと診断する。病理医たちはすぐわかる。細胞異形、構造異形から診断するわけね。日本は顕微鏡を使って 100 年以上になる。ね。
我々は、正常細胞とがん細胞、両方見ているからわかる。皆さんの顔を見るとすぐわかるね。この講演は面白くないとかね。すぐわかる。風貌を見て心がね。

そして、これが、怒ったチャウチャウ犬、疲れ切ったチャウチャウ犬、穏やかな風貌のチャウチャウ犬（スライド） 、風貌は一夜にして変わる。みなさん、こういう顔になった方がいい。一夜にして変わる。小学館で、『いい覚悟で生きる』という本を出して。ここでもチャウチャウ犬が出てくる。支えると寄り添うのと違いだよ。言葉と言葉の会話はできる、会話じゃなくね。対話。そして、チャウチャウ犬のような風貌、チャウチャウ犬、『チ

ャウチャウ症候群認定証』を出している。欲しかったらあげるよ。チャウチャウ犬の風貌、シャクトリ虫運動、沈黙で寄り添える。シャクトリ虫は、自分のオリジナル・ポイントを固めてから、後ろの吸盤を前に動かして、そこで固定して、前部の足を前に進める。かくて、いつも自分のオリジナルティを失わないですむ。

正常細胞は自分の持ち場を離れたら死ぬんです。がん細胞は自分の持ち場を離れても生きれる。シャクトリ虫のように動いて。と、いうことで、樋野動物園というのを作ったんですね。みなさん。入所したかったら自分で名前をつけるだけ、ゴリラやパンダ、何でもいいんですね、何でやっているかというと。

「あなたは、そこにいるだけで、価値のある存在である」。人間は存在自体に価値がある。そして『個性と多様性』がある。上野動物園の旅で、まあ、こういうことをして、がん患者さんたちがこういうものを作って、こういうことだね。「がんと生きる　言葉の処方箋」という映画ができて、「音楽の処方箋」というCDもできてね。さらに「ほっとけ、気にするな」という歌をつくる。そして、『新渡戸稲造　壁を破る言葉』という本を出して、「新渡戸の夢」と言う映画もできたということだね。

そして、『クボタ・ショック』の2005年に順天堂大学で『アスベスト・中皮腫外来』ができた。そして、2008年に『がん哲学外来』患者さんやその家族と面談し、苦しみを和らげる。それを始めたということだね。医療者と患者の隙間を埋める。『がん哲学外来』は、がんも単なる個性として、患者さんに寄り添い、対話を実践し、相手を思いやる心。患者に対する慈愛の心の姿勢を貫いて、純度の高い専門性と社会的包容力、『病気であっても病人ではない社会構築』を目指すということだね。

この大学の看護の学生さんも『がん哲学カフェ』を始めた方がいいね。誰でもできるよ。そして、『アスベスト・中皮腫外来』に全国からたくさんの患者さんが来て、そして、『がん哲学外来』を始めたというとだね。ハンセン病の人たちが、『新渡戸稲造生誕150周年記念』の企画ということで、『がん哲学外来』を長島愛生園でもされるようになったということだね。

1775年、イギリスの外科医ポットが、煙突掃除夫の陰嚢がんの報告した。そして、それを学んだウィルヒョウが、がんは刺激によって起こるとした。
そのもとに留学した山極勝三郎が、ウサギの耳にコールタールを塗り続けて、世界で最初にがんを作った。

ネズミに肝がんを作る。日本は化学発がん研究の創始国だね。そしてこれを作った吉田富三は福島県の生まれで、福島県立医大でも『がん哲学外来』をされているということだね。
治療には手術とか放射線治療、薬物療法、そして緩和治療がということだね。

がんにはね、6 つの特徴がある。一番怖いはインベージョン、浸潤、転移だね。

まあ、がんというのはね。初期の変異が遺伝子的変化とともに、分子の相互作用によって様々に拡大し、将来予測が不可能になる。これは初期のわずかな変異で大きな効果が出ること意味する。非平衡状態にあり外部と相互作用する開かれた複雑系ではジェノタイム(初期状態)も同じでも、外部から、意識的に適時に介入すれば、ある特異点（フエノタイム）で分岐し、多様性のある制御（ドラマタイム）が可能になります。 病気はドラマタイプになる故に予防・治療が出来るということだね。

がんも人生も開いた扇のようなものです。ちょっとした遺伝子の変異から始まって、20 年、30 年ぐらいかかってがんになる。「われ Origin of Fire たらん」。僕の名前は知ってますか？ 樋野興夫。英語で訳すと、「Origin of Fire」

山極勝三郎は、長野県の上田市に生まれてね。上田市でシンポジウム、「うさぎ追いし」いという映画もできたね。類い稀な忍耐を持って、日本の独自性を強く主張し、日本の存在を大きく世界に示した。アメリカ時代の恩師の Knudson が亡くなって、ボストン大学で追悼の記念の講演をした。 ということだね。

人生邂逅の 3 大法則は、良き先生、良き友、良き読書、ということだね。 複雑な問題を焦点を絞り単純化する。自らの強みを基盤とする。なくてならないものは多くない。なくていいものに縛られるために、「Red herring」、相手にその気にさせて、間違った方向に行かせるのに気をつけようということだね。

さっき言ったけどね、我々は、交感神経と副交感神経、相異なるものが緊張感の上に共存しています。で『楕円形の心』という本を出した。真理は円形にあらず、楕円形である。 1 個の中心の周囲に描かれるべきものにあらずして、2 個の中心の周囲に描かれるべきものである。人は何事にあらず、円満と称し円形を要求するが、天然は人の要求に応ぜずして楕円形を探るは不思議である。患難の坩堝の内に燃え尽くす火に鍛えられて、初めて実得し得るものである。

涙とともにパンを食べたものでなければ、人生の味はわからない。これはゲーテ。 ゲーテをこよなく敬愛した作家のヨハンナシュプリが書いたアルプスの少女ハイジの現代的意義は、喜んで無邪気に小さなことに大きな愛を込める。

人生の目的は、品性の完成で、小さな湧水になり、いつか大きな川になる。

日本人は、つもり違いね。高いつもりで低いのが教養。低いつもりで高いのが気位。深いつもりで浅いのが知識。浅いつもりで深いのが欲望。厚いつもりで薄いのが人情。薄い

つもりで厚いがメンツ。強いつもりで弱いのが根性。弱いつもりで強いのが自我。多いつもりが少ないのが分別。少ないつもりで多いのは無駄だね。日本人はつもり違いだね。これをコピーしてトイレに貼っておくといいね。

そういうことだよ。まあ、そういうことでね、これ、大体ね、多摩霊園、多摩霊園は内村鑑三と新戸部稲造の墓がある。『言葉の処方箋』10ヶ条 &『偉大なるお節介症候群』10ヶ条を出してね。心がけにより逆境も順境とされる。ユーモアに溢れ心優しく、俯瞰的な大局観のある人物、いい人生の最期の5年で決まる。若い時、苦労しようが最期には、穏やかな人はいいということだね。

人のからだに巣食ったがん細胞に介入し、その人の死期を再び未確定の彼方に追いやり、死を忘却させる方法を成就すること。

人生いばらの道、にもかかわらず宴会、人は最期に死ぬという大切な仕事が残っているということだね。いつも先生の夢は何ですかと小学生は質問する。？ね。勝海舟、新島襄、内村鑑三、新渡戸稲造、南原繁、矢内原忠雄、吉田富三、そして菅野晴夫、Knudsonの10人で天国でカフェを開く。皆さん、お茶係で来てください。必ずクラスの1人か2人は、『私をお茶係に採用してください。』と言う。

これが教育だね。冗談を本気でする胆力だね。『がん哲学』が若き日から学びつける南原繁の哲学と吉田富三のがん学をドッキングさせたものである。『がん哲学』は生物学の法則、プラス、人間学の法則、『がん哲学』から得られる生きる力との根源的な意味を考えると、がん細胞の発生と、成長に哲学的な意味を見出そうとする。病理学の出会いから南原繁研究会を立ち上げて、毎年シンポジュウムをやっているということだね。

勝海舟の屋敷があったところで、講演を頼まれた。その屋敷を、アメリカの家族に貸していた。そして、クララのお母さんが亡くなった時、勝海舟の奥さんが言った。悲しい時には、私たちのところにいらして、一緒に泣きましょう。そして、あなたが幸せな時も一緒に笑いましょう。勇気を出して。これから先の長い年月のことを考えず、今日という日以外には日は無いと思って、ただ、毎日をお過ごし下さいと言った。これが訪れる人を暖かく迎える『がん哲学外来』の原点だ。

これは、軽井沢でアメリカ人を対象にして、講演を英語でした時のタイトルは、「プロの為さざること五箇条」、プロは人をその弱きに乗じて苦しめず。プロは人に悪意を帰せず。プロは人の劣情に訴えて事を為さず、プロは友人の秘密を公にせず、プロは人と利を争わさず、『真の知識』『あらゆる識別力』『真に優れたものを見分ける。』これが教養で、東久留米でも読書会を続けている。

内村鑑三の『代表的日本人』と、新渡戸稲造の『武士道』の読書会を、2007年から毎

月、やっている。
最も必要なことは、常に志を忘れないよう心にかけて記憶することである。『がん哲学』は生物学と人間学。人間学は、新渡戸稲造、内村鑑三、南原繁、生物学は、菅野晴夫、Knudson、吉田富三から学ん『がん哲学外来』を始めたということだね。

がんの良性化、Rehabilitation of Cancer cell がんも身の内。個性。正常細胞は、使命を自覚して、任務を確実に果たす。自己制御の犠牲の上に成り立つ。 がんは真の目標を失った細胞集団、がん細胞はエゴイスト集団、そして Intentional Delay、そして、天寿を全うしてがんで死ぬ。 がん学の、新時代の形成力、 20 世紀はがんを作る時代だった。日本は化学発がんの創始国で、21 世紀はがんを遅らせる研究で、再び世界をリードする。「がんの原因論」を明確にし、「がんの制御」の根拠を示し、「がんの進展阻止」を示す。

そして、天寿を全うして、我々は何歳で死にますか。

人間の寿命は 120 年。生きて 120 年。皆さん 120 で死ぬよ。人間の寿命を 120 に、どこに書いてある。さっきも言ったでしょう。すぐ忘れちゃうでしょう。旧約聖書創世記 6 章 3 節　人間の寿命を 120 にする、と書いてある。さっき言ったアダムが 930 歳。そして、ノアの方舟のノアは 950 歳。そして、アブラハブは 175 歳、モーセは 120、まあ、ここはキリスト教の学校だから聖書を読んでいるでしょう。ねえ、読んでないでしょ。

学問的、人間的な責任で手を差し伸べ、科学的な責任で病気を診断、治療する。これは患者と温かい人間としての関係、がんも病気も単なる個性である社会を作る。個性が引き出されるとその人の心に花が咲く。病気であっても病人ではない社会を作る。まあ、市長は、これを作った方がいいよ、病気になっても病人でない社会になる。そして、あなたは、どこにいるのか、これが人類に与えた最初の質問。

私はここにいます。私を使わせてください。これだね、人間、人生から期待されている。人生に期待するのではない。それぞれの使命が与えられている。 自分の使命を見出して、人生から期待されているということで、人間とは、使命を持って生まれてということだね。質問があったら質問してください。どうもありがとうございました。

## ●講演を聞かれた方々の感想

※みなさまからお寄せいただいた原稿にございました「ガン」または「癌」の表記は、
樋野先生の表記「がん」に統一させていただきました。何卒ご了承ください。

一般社団法人オリーブビーイングは、このたび中部学院大学・中部学院大学短期大学部宗教委員会主催の講演会「がん哲学外来へようこそ」を共催させていただきました。

講演で特に心に残ったのは、「解決はできなくても、解消はできる」という言葉です。病気など、人生には簡単には解決できないことがあります。それでも、誰かと語り、思いを分かち合うことで、心の重荷を軽くすることはできる。また、内村鑑三の「真理は楕円形」という言葉から、患者さん・家族・医療者など、それぞれの立場の“真理”が存在することを大切にする姿勢学びました。「からし種」のような小さな希望や関わりが、人を支える力になることを改めて感じた非常に有意義な講演会でした。

一般社団法人　オリーブビーイング　代表理事　柴橋　有美
岐阜市長　柴橋　正直

今回の講演で心に残ったのは、「寄り添うこと」と「支えること」についてのお話です。相手のために何かをしてあげることだけが支援ではなく、言葉を交わす「会話」がなくても、ただそばにいることが、その人の支えになることがあると学びました。仮面を外し、互いの心の垣根を取り払うことで、本当の意味で人と人がつながることができる。「何をしてあげるか」ではなく「どう共にいるか」。オリーブビーイングの活動においても、大切にしていきたい視点だと感じました。

一般社団法人　オリーブビーイング　理事　M．T

「岐阜・生と死を考える会」の 7 月例会のプログラムは、大学の「キリスト教研修会」に共催として年初に計画されました。一会員として研修会に出席することができました。

私たちは、治療の不安から人間関係の悩みまで、主治医には打ち明けづらいそんなことが、こころの葛藤や悩みを受け止め支え合う場をあるといいなあと思います。樋野先生は、「がん哲学外来」を 2008 年に開設されメディカルカフェとして全国展開となっています。「岐阜・生と死を考える会」も 1995 年に設立され、今日まで様々な分野の講師のお話を伺い、自分や身近な人の「生と死」を考えてきました。お話の後には講師を囲んで和やかに話し合いの時を持っています。この活動と重なり合うところが多いと感じました。私事で恐縮ですが、小さな老人施設に数年前から関りを持っています。90 歳以上の高齢者と向き合う中

で「傾聴」「寄り添う心」を大切に余生を過ごしていきたいと願っています。講演の中で印象に残った言葉は「傾聴」30 分間無言で「寄り添う」ことができますかでした。

岐阜生と死を考える会　K．N

「がん哲学」ってなんだろう?

哲学と聞くだけで難しい学問と構えてしまう。まして「がん」と聞けばなおさらである。両親とも胃がんで他界している。夫も半年前に胃がんで一部を切除。そんな中で臨んだ講演。スクリーンに映し出された解説や名言そしてご著書。次々に画面が移り、ゆっくり読もうにも追いつけない。先生のお話しぶりは優しい語りではあるが明確に聞き取れない。一対一で眼を見てお話を伺えば状況は一変するのであろう。早速次の三冊を手に取った。『がん哲学』『いい覚悟で生きる』『明日この世を去るとしても、今日の花に水をあげなさい』。後者二冊はあの講演でお話されたことそのもの。見開きの２ページでとても読みやすくどれもストンと腑に落ちる。引用されている先人の言葉を紐解いてみたいと思った。一冊は夫に勧めたが何の感想も語らなかった。私も尋ねようともしなかった。
地域で高齢者サロンを開いているが、同様に「がんカフェ」なるものが開けたら一味変わった有意義なカフェになるのではないか。
どのような終末を迎えるかわからないが心の準備をしなくては。

岐阜生と死を考える会　N．S

今回の講義を通して、医療者には「病気を診断、治療する」という医学的・科学的な役割だけでなく「患者さん一人ひとりの人生や思いに寄り添う」という人間的な役割もあることを学びました。病気だけを見て治療を行うのではなく、その人がどのような人生を歩んできたのか、何を大切にしているのかを理解し、その人らしさを尊重することが医療者には求められると感じました。病気によってその人の価値が変わるのではなく、その人自身を大切にすることが重要だと思いました。

また、「さよならのない別れ、別れのないさよなら」という言葉を知りました。人は亡くなってもその人との思い出や言葉、生き方は家族や周囲の人の心の中には残り続けるため本当の意味で完全な別れではないと知りました。

しかし、病気や入院によって今までの生活や家族との時間、健康な頃の自分と離れることも別れの一つであり、患者さんは身体的な苦痛だけでなく、精神的な不安や悲しみを抱えていることを改めて考えさせられました。看護師は患者さんの病気を看るだけでなく、その人の気持ちや家族の思いにも寄り添い安心して自分らしく過ごせるよう支える存在であることを学びました。

中部学院大学　看護リハビリテーション学部　看護学科　２年　E．W

今回の講義を通して、がんはただ治す病気というだけでなく、患者さんが病気と向き合いながら自分らしく生きていくことを支える姿勢が大切だということを学びました。2人に1人ががんになる現代において、がんはだれにとっても身近な病気であり、将来看護師として働く際には、患者さんだけでなく家族への支援も必要だと感じました。

また、がん患者さんへの関わりにおいては、寄り添うことや自分らしい生活の継続を支えることの重要性を再認識しました。特にがん哲学のお話の中にあった「聴診器は対話」という言葉が印象に残っています。患者さんの不安や悩みを解決しようとするのではなく、まずは言葉に耳を傾け、思いを受け止めることが患者さんとの信頼関係の構築につながると感じました。

がんになったからといって、患者さん自身の存在や個性が変わるわけではなく、がんも一つの「その人らしさ」であり、価値観や人生までを失うものではないということを学びました。そのため、医療者は病気だけを見るのではなく、患者さんがどのような思いですごし、これからどのように生きていきたいか、過去を振り返りながら将来のことも一緒に考えて理解することが大切だと感じました。一人の人として向き合い、その人らしい生活や人生を支えることができる看護師になりたいです。

中部学院大学　看護リハビリテーション学部　看護学科　2年　B．H

樋野興夫先生の講演を聞いて、特に印象に残ったのは「がんは2人に1人がなる病気」というお話でした。がんは特別な人がなる病気ではなく、誰にも起こりうる病気（個性）であると分かりました。また、治療だけを重視するのではなく、不安や悩みを安心して話せる場があることの大切さを知り、単なる会話ではなく対話を通して患者さんの心に寄り添う姿勢が印象に残りました。

さらに、先生は医療者としての使命は、「病気を診断・治療する学者的な面」と、「患者さんに手を差し伸べる温かい人間としての面」の2つがあると話されていました。そこでも、専門的な知識や技術だけでなく、不安や悩みに寄り添う姿勢の大切さを学びました。私も、看護師になったら患者さん一人ひとりの思いや価値観を大切にし、安心して話せる存在になりたいと思います。

中部学院大学　看護リハビリテーション学部　看護学科　2年　O．Y

今回の講演を聞いて、「人はがんとともにどのように生きていくのか」という言葉が特に印象に残りました。また、がんによる不安や苦しみを完全になくすことはできなくても、周りの人の言葉や支えによって気持ちを軽くすることができるという話が心に残りました。さらに、「寄り添う」と「支える」は違うというお話から、医療者には病気を診断・治療するだけではなく、人として患者さんに手を差し伸べ、心を支える役割もあるということを学びました。

患者さん一人ひとりの思いや人生を大切にすることが看護においても重要だと感じました。今回の講演会を通して、病気だけをみるのではなく、患者さんの心にも目を向け、その人らしく生きられるよう支えられる看護師になりたいと思いました。講演中に話されていた「人間は言葉によって癒される」という言葉を忘れずに、患者さんに行動だけではなく、言葉でも安心や希望を与えられるような関わりをしていきたいと思いました。

そして、人にはそれぞれ与えられた使命や役割があるという話を聞き、自分自身も与えられた役割を大切にしながら、一日一日を生きていきたいと思いました。

中部学院大学　看護リハビリテーション学部　看護学科　２年　Ｆ．Ｓ

今回のがん哲学の話を聞いて、病気を抱える人への関り方や人生の考え方について学ぶことができました。特に印象に残ったのは、「病気であっても病人でない社会をつくる」という言葉です。がんになると周りの人から「病気の人」として見られてしまいがちですが、病気になる前からの生活や家族、仕事などその人には大切にしてきた人生があります。このことから、病気だけを見るのではなく、その人自身を理解することが大切だと感じました。また、「悲しいときには一緒に泣き、幸せなときには一緒に笑いましょう」という言葉も印象に残りました。つらい状況にいる人に対してただ励ますだけでなく、相手の気持ちに寄り添い、一緒に受け止めることが大切なのだと感じました。「言葉の処方箋は何を言うかではなく誰が言うか」ということからは患者との信頼関係を築くことの大切さを学びました。今回の話を通して病気になったから人生が終わるのではなくその人らしく生き続けることが大切だと学びました。これから看護師として患者一人一人と向き合えるようにしていきたいと感じました。

中部学院大学　看護リハビリテーション学部　看護学科　２年　Ｓ．Ｈ

今回の講義での「がん哲学外来へようこそ」というキリスト教研修会では、今まで知らなかったがんの発症による「生きることの根源的な意味」を知るきっかけとなる良い機会であった。樋野先生の出身地である島根県出雲大社鵜峠は医療の発祥であり、『「最も剛毅なる者は最も柔和なる者であり、愛ある者は勇敢なる者である」とは、「高き自由の精神」を持って医療に従事する者への普遍的な真理であろう。「他人の苦痛に対する思いやり」は、医学、医療の根本である。』と述べていた。「がん哲学」・新訂版「がん哲学」より電子計算時代であり、宇宙時代であっても、人間の身体の出来やその心情の動きは昔も今も変わらないと述べており、納得した。「超近代的で合理的と言われる人でも病気になって自分の死を考えさせられる時になると、太古の人間に変わる。」という考えは人間の真理を突いていると感じた。

「がん哲学外来」という言葉はこの講義で初めて聞いたが、キリスト教に関係しているものなのかと思った。がん哲学外来の「絶対性大原理」では愛がなければ全ては無意味で

あり、「真価」は『①愛に溢れた雰囲気、②静かな口調、③にもかかわらず』これらが大切であり、「心得」は『①仮面を外し、心の垣根をとる、②秘密を守る、リラックスした時間を過ごす、③正直になる、積極的に人々に仕える』とある。これらの言葉を聞き、これからの人生をどう生きていくか、人の根源について考えさせられた。

現代の治療では、病気を治療するだけではなく、患者の心や生活にも目を向けることが求められている。がん哲学外来は、その理念を実践する場として重要な役割を果たしていると思った。今回の講義を通して、患者に寄り添う為には専門的な知識だけでなく、相手の価値観や思いを尊重しながら対話を重ねる姿勢が不可欠であると理解した。今後もどんな場面でも相手の立場に立って考え、安心して思いを語れる関係を築くことの大切さを忘れずに行動したいと思う。

中部学院大学　人間福祉学部　人間福祉学科　１年　Ｕ．Ｍ

今回、「がん哲学外来へようこそ」という講演に参加して、多くことを学びました。私は、がんは病気として治すことをだけが目的だと思っていた。しかし、講演を聞いた後で，患者と共に安心して生きる力を支えることも医療の大切な役割であると理解した。

特に印象が残ったのは「医療の根本は他人の苦痛に対する思いやりである」という言葉である。また、「最も剛毅なる者は最も柔和なる者であり、愛ある者は勇敢なる者である」という考え方にも深く共感した。私は、医療者は専門の知識や技術だけではなく、患者や家族の気持ちを理解し、支える姿勢が必要であると感じた。

さらに、「がん哲学」では病気になった人がどのように生きるか、家族や周囲の人がどのように支えるかを考えることが重要であると学んだ。講演の中で紹介された「言葉の処方箋」という考え方も印象的であった。励ましの言葉だけではなく、相手の話をよく聞き、一緒に考えることが患者の心の支えになることを知った。

福祉と医療に関する人には患者を一人の人間として尊重し、患者の考え方と気持ちを大切に、サービスを実施する。この講演を通して病気だけを見るのではなく、人の生き方や心にも目を向けることの大切さを学んだ。この学びを今後の勉強や将来の実践に生かしていきたい。

中部学院大学　人間福祉学部　人間福祉学科　１年　Ｐ.Ｙ.Ｎｇ

－生きる―

現代は２人に１人ががんになる時代と言われています。「がん哲学外来へようこそ」という演題は、興味深いテーマ性と共に、先生のこれまでの活動に基づく多くの深い意味が込められていました。

また、医学博士に相応しく、病気としての「がん（癌)」に関する深い見識と共に、「哲学的」に私たち一人ひとりの生き方を深く問いかけてくるご講演でした。

その数々の珠玉の言葉は、私自身の心に深く響きました。高齢になった私のこれからの生き方に多くの示唆と光を与えてくださいました。日本人の２人に１人ががんになる時代ですが、樋野先生は「病気であっても病人ではない。人は最後に『死ぬ』という大切な仕事が残っている。これから先の長い年月のことは考えないで、今日という日以外には日が無いと思って過ごしなさい」と、学生たちや会場の方々に話されました。高齢の私にとって、深く勇気づけられると同時に、身を正す思いでもある言葉でした。

「生きる」ことを考える、貴重な時をくださった樋野興夫先生に、心から御礼申し上げます。

岐阜済美学院　学院長　片桐　多恵子

「一度聞いてもわからない」から始めて

樋野先生のお話を拝聴しながら、40 歳の若さで血液のがんで亡くなった私の兄のことを思い出しておりました。病室で闘病をしている姿ではなく、入院生活のなかで希望と失望を繰り返しながらも、短歌をはじめたり、闘病記を書いたり、そして病室で家族や医療スタッフと談笑する姿が目に浮かびました。がんの罹患は理不尽な出来事だったけれど、がんとの関わりもセットで、兄の豊かな人生に思いをはせました。

そして、「言葉の処方箋」という言葉が印象に残りました。ソーシャルワークの個別支援は、まさに「言葉の処方箋」ではないか。支援される側だけでなく支援する側も含めた互いの関係性、その時期やタイミング、場など、さまざまな要素が折り重なって、「言葉の処方箋」が生まれるのだと思います。そして、そのベースには、さまざまな分野の人々との日々の交流があることが大切だという質疑応答でのやり取りから、日々の教職員の交流の大切さや、多様な人々が交流しあえる場づくりが本学の役割のひとつであると、改めて認識することができました。

恥ずかしながら、この講演会まで樋野先生について存じあげておらず、初めて先生の幅広い、あふれ出すような「知」に触れさせていただきました。冒頭の「スルメ症候群数え歌」で例えれば、「まったくわからない」というレベルです。早速、先生の著書を数冊買い込み、少しずつ噛みしめています。

楽しくも、自分自身が「物事をちゃんと突き詰めて考えているのか」と問われているような厳しさを感じ、さまざまなインスピレーションが湧いてくる樋野先生のお話を、またぜひ拝聴したいと思っています。ありがとうございました。

中部学院大学　人間福祉学部　人間福祉学科　教員　Ｓ．Ｍ

今回の講演を通して、がんについて学ぶことは、その機序や治療に関する知識を得るだけではなく、一人の人間が病気と向き合いながら、どのようにその人らしく人生を歩んでいくのかを考え続けることでもあると、改めて感じた。

私が看護学生だったころ、がん患者が抱える苦痛は、身体的な苦痛だけではなく、不安や孤独などの心理的苦痛、仕事や経済面、家族関係に関する社会的苦痛、さらに生きる意味や死への恐れといった苦悩を含む「全人的苦痛」を捉える必要があると教わった。

その人らしい人生を支えるためには、症状や治療による身体的苦痛を和らげるだけでなく、その人の言葉に耳を傾け、思いに寄り添い、言葉にならない思いにも心を傾ける姿勢が求められる。一人ひとりの価値観や意思を尊重し、病気だけをみるのではなく、その人の生活や人生全体を支えることこそが、本質であると再認識した。

中部学院大学　人間福祉学部　人間福祉学科　教員　M．H

寄り添うことの大切さ

妹が脳腫瘍で深刻な状況にあるなかでの樋野先生のご講演で、私は前のめりで聴かせていただきました。半年前までは面会を終えて帰る時には手を振ってくれたのに、やがて言葉を発せず、眼も閉じ、ただ息をしているだけの状況になり、現在は病院を出て、ある施設でお世話になっています。私は時間を見つけては面会に行き、耳元で「今日は暑かったよ」などと、どうでもいいことを話し掛けるのですが、反応のない妹への呼び掛けは１分くらいしか続かず、申し訳ないと思いつつ早々に退室してしまいます。

樋野先生はご講演の中で寄り添うことの大切さを述べられました。話し掛ける言葉はなかなか続きませんが、あれから傍にいる時間が長くなりました。

中部学院大学　教育学部　子ども教育学科　教員　K．N

教育者として、人としての責任

樋野先生の「学問的・科学的な責任で病気を診断・治療する。人間的な責任で患者に手を差し伸べる」というお話を伺い、この言葉を教育に重ねて受け止めました。教育者としての専門的な責任をもって、教育の現状や授業の在り方を的確に伝え、確かな学びにつなげる。一方で、人間的な責任をもって、一人一人の学生に温かく手を差し伸べる。教育にはこの両方が必要なのだと思います。

様々な背景をもつ学生が在籍していますが、優しく寄り添い、時には励まし、時には厳しく向き合いながら、４年間で人としても成長できるよう支えていきたいと思っています。樋野先生のお話は、教育者として、そして一人の人間として果たすべき責任を改めて問い直す、貴重な機会となりました。

中部学院大学　教育学部　子ども教育学科　教員　M．T

解消へと導く手差しのあり方

樋野興夫先生の講演を拝聴し、二人に一人ががんに罹患する現代において、リハビリテーション専門職が果たすべき役割を深く再考させられました。

理学療法士として、私たちはつい機能回復という「解決」を急いでしまいがちです。しかし、樋野先生の説く「解決はできずとも解消はできる」という視点は、臨床の在り方を根本から見つめ直すきっかけをくれました。身体の自由が損なわれたとしても、患者さんの存在そのものを認め、対話や沈黙を通して傍に在り続けることで、心の苦しみは「解消」されていくのだと感じました。

また、「人生から期待される」という逆転の発想は、私たちに「今、自分にしかできない使命」を問い直させてくれます。科学的根拠に基づいた治療と共に、一人の人間として寄り添う「手差し」の精神を大切に、真の癒しを追求していきたいと改めて強く思いました。

中部学院大学　看護リハビリテーション学部　理学療法学科　教員　C．K

樋野興夫先生のご講演を拝聴し、大変感銘を受けました。

私自身、身内をがんで見送り、臨床現場でも多くの患者様と向き合ってまいりました。それだけに、がん哲学外来の大原理である「愛がなければすべては無意味」という姿勢は、身体のケアだけでなく、患者様の抱える恐怖や孤独にどう寄り添うべきかという私自身の迷いの根幹を問われる思いでした。

また、「人生いばらの道、にもかかわらず宴会」という言葉の処方箋にて、病の苦しみの中にあっても、患者様が心の平穏や喜びを見出せるよう寄り添うことの大切さを教えていただきました。

患者様の心の垣根を取り払い、最期の大仕事までその人らしく生き抜けるよう、医療者としてどのように関わっていくべきか、自身の姿勢を改めて見つめ直す貴重な時間となりました。

中部学院大学　看護リハビリテーション学部　理学療法学科　教員　M．Y

樋野興夫先生の「がん哲学外来へようこそ」のご講演を拝聴し、がん患者さんにとって医療者との対話が大きな支えとなることを改めて感じました。

先人たちの金言には、病と向き合う患者さんの心を軽くし、生きる意味や希望を見いだす力があることを学びました。私自身、緩和ケアの現場に携わる中で、症状緩和だけでなく、患者さんの不安や孤独な思いに寄り添うことの大切さを実感してきました。

対話を通して患者さんが自らの思いを語り、その人らしい生き方を見いだせるよう支援することも看護の重要な役割だと考えます。一人ひとりの思いや価値観を尊重し、患者さんの心を支える関わりの意義を、看護を学ぶ学生たちにも伝えていきたいと思います。今回の講演は、看護の本質について改めて見つめ直す貴重な機会となりました。ありがとう

ございました。

中部学院大学　看護リハビリテーション学部　看護学科　教員　Ｉ．Ｍ

樋野興夫先生のご講演では、偉大な先人たちの金言を交えながら、がんを医学的に理解することと同時に、がん患者さんを一人の人間として支えることの重要性について学んだ。特に、「病気であっても病人ではない」「解決できなくても解消はできる」という言葉が印象に残った。

また、がん哲学外来を「人生の処方箋」と捉え、対話を通して患者や家族に寄り添うことの大切さを学んだ。医療者には、病気を診断・治療する学問的・科学的責任と、人として温かく寄り添う人間的責任の両方が求められるというお話に深く共感し、これまで大切にしてきた看護の本質を改めて肯定していただいたように感じた。

先生の思いやりや慈愛、ユーモアあふれる語りに触れ、人を支える医療の本質について深く考えさせられた研修であった。

中部学院大学　看護リハビリテーション学部　看護学科　教員　Ｋ．Ｍ

大変心に染み入る言葉をたくさんいただくことができました。「病気は人生の夏休み」「人生から期待される生き方」「主体の自覚～病気であって病人でない」などなど…。

また、医療者の２つの使命として、「学問的・科学的な責任」と「人間的な責任」を挙げられたのが印象的でした。病気を診断・治療すると共に、患者と温かい人間としての関係を築くという使命は、医療従事者に関わらず、人間に関わる職種に共通する理念が多分に含まれていると強く考えます。

私は所謂「がん家系」の血筋なので、いつ自分に降りかかってきてもおかしくないと思って生きています。主体の自覚を持って、自分の人生を楽しみ、愛しみ、謳歌していきたいです。

中部学院大学　スポーツ健康科学部　スポーツ健康科学科　教員　Ｇ．Ｋ

対話の持つ力

樋野先生のお話を聞き、「対話」の持つ力について改めて考えさせられました。がん哲学外来では、病気そのものを治療するだけではなく、相手の言葉に耳を傾け、その人が抱える不安や悩みを受け止めることを大切にされていることを知りました。

特に「言葉の処方箋」という考え方が印象に残り、何気ない言葉であっても相手の心を支え、生きる力につながることを学びました。そのためには相手の話を遮らずに聴く「傾聴」が必要です。これはがん哲学外来に限らず、教育現場や教育機関においても同様に大

切なことであり、子どもや生徒、学生等、一人ひとりと向き合い、対話を重ねる姿勢を取り入れていきたいと感じました。

中部学院大学　スポーツ健康科学部　スポーツ健康科学科　教員　N．S

樋野興夫先生の「がん哲学外来へようこそ」の講演を拝聴し、病気と向き合う人々の心に寄り添うことの大切さについて深く考えさせられた。がんは単なる病気ではなく、人の生き方や人生の意味を見つめ直す契機にもなるということが非常に印象に残った。先生は、患者や家族の不安や悩みに寄り添い、対話を通じて心の支えを見出すことの大切さを語られ、患者が抱える不安や孤独、人生への問いに耳を傾けることも医療の重要な役割であることを学んだ。

また、日本人の２人に１人が「がん」になる時代、自分自身の生きる意味について改めて考える機会を得た。自分自身も周囲の人との対話を大切にし、相手の気持ちに寄り添える人になれるよう、また人生には困難があっても、その中で希望を見いだしながら前向きに歩むことの大切さを学んだ。

岐阜済美学院　事務職員　Ｆ．Ｙ

私が樋野興夫先生の「がん哲学外来へようこそ」の講演を拝聴し、感銘を受けたことは以下のようなキーワードです。

「解決できなくても解消はできる」　「病気になっても病人である必要は無い」
「病気は人生の夏休み」　「愛がなければ全ては無意味」
「“よりそう”と“支える”の違い、対話をすること」　「言葉の処方箋」
「がん哲学は誰でもできる、がん治療という学者的な面と違い、人間的な責任で手を差し伸べること」

テーマを見た時はとても難しそうという印象でしたが、先生の講演を聴く中で、「解決」できない問題でも、よりそうことで「解消」することが自分にもできるという感情が沸いてきました。身体の治療だけでなく、心や人生を支える仕組みを広げる樋野先生の「がん哲学外来」の活動が会場の中でも広まっていく瞬間を実感しました。

岐阜済美学院　事務職員　Ｓ．Ｈ

人は言葉によって癒される

特に心に残ったフレーズは、がんになったときの心境の「なるようになれ。夏休みが来た。自分を見つめる機会に」という言葉。がんはただ恐れるべきものではなく、自身の生き方や価値観を見つめ直す契機にもなり得るというお話を、がん経験者のひとりとして興

味深くお聞きしました。
また、「病気であっても病人ではない。がんは個性に過ぎない。人間はいつか死ぬ」などの「がん哲学」の考え方は、病気と人の価値を結びつけてはいけないことを改めて教えてくれました。さらに、「人は言葉によって癒される」いうお話も、経験的に納得できました。「何を語るかではなく誰が語るか。支えるのではなく寄り添う」などの言葉から、人との関わり方を考えさせられました。
相手の立場に立ち「人間的な責任」を持って手を差し伸べることを、今後の生活や周囲との関係の中で実践していけたらと思います。

中部学院大学　事務職員　Ｉ．Ｋ

2026 年度キリスト教研修会に出席させていただき、樋野興夫先生のお話を伺う機会を得ましたが、冒頭で樋野先生がおっしゃった「一度聞いてもわからない、二度聞いても分からない、三度聞いて首傾げ、四度聞いてうなずける」という言葉の通り、なかなか一度聞いただけではなかなか内容を理解するのは難しいところが正直な感想ではありました。
しかし、先生の言葉に耳を傾けていると、不思議に心にとどまる「言葉」がありました。例えば、「本当の使命はいつ与えられるかわからない」、「解決できなくても解消はできる」、「日本は肝臓のようであるべきである」などの言葉です。
「不思議に心に留まる」➡「どのような意味だろうと考える」➡「自分なりの考えを深める」ことを繰り返しながら、まさに「スルメ」のように先生の言葉を反芻しています。
先生の著書のタイトルに「種を蒔く人になりなさい」という書籍がありますが、まさに「言葉の種」をいただいたようなキリスト教研修会でした。

中部学院大学　事務職員　Ｍ．Ａ

ことばの内にある命の発露 －キリスト教研修会に参加して－
講師の樋野先生の主宰されておられる「がん哲学外来」、その実践の場としての「メディカル・カフェ」の活動は、患者と「魂の対話」を成立させることで患者の人格に「癒し」（苦痛を軽減し希望を喚起する）をもたらしていると感じた。キリスト教用語で「牧会」という言葉があるが、この本来の意味は牧師が信徒になす「魂への配慮」だ。
その際に牧師の「武器」は対話を通して聖書の言葉の中にある「命」を信徒の魂に伝えることにある。樋野先生は、科学者としての医師であり、同時に「魂の配慮者」であると思った。
講演で樋野先生はがん患者への「魂の配慮」という深淵で重々しいテーマをまるで歌のような抑揚で、ところどころ禅問答のような象徴的言葉で、またある時は聖書や新渡戸稲造、内村鑑三はじめ近代日本の偉大な魂の配慮者たちの言葉を引用しながら語られた。そのお話は、ヨハネ福音書１章の「ことばの内に生命があった」を実感させた。樋野先生の

もとに来られる沈み切った様子の患者さんがカウンセリングを終えると笑顔を取り戻して帰られるというお話があったが、それはまさに患者の魂が樋野先生の言葉の奥に宿るこの生命に触れたからだと思った。

今回の講演でも多くの聴衆がこの「命の言葉」に触発されて、大きな反響があった。これが機縁となり岐阜県、東海地方にこの運動が魂のよき知らせとして展開してゆくことを祈念するものである。

中部学院大学短期大学部　宗教主事　八木橋　康広

－言葉を紡いで心に届けるということ－

今回樋野先生に来ていただいた前後に、かつて親しかった人たちのがんによる死を知らされました。かつて勤めていた松山東雲中学・高校の教え子であり、親しい知人のお嬢さんが 40 歳代で亡くなられたと聞きました。先日は、福岡の教会にいた時大学生だった人が 60 歳すぎで亡くなられたという知らせがありました。つい数日前 40 年以上前に駆け出しの頃赴任した教会を訪ねました。当時親しくしていた中学生のお母さんから数年前に 50 歳代で亡くなったと聞きました。それぞれに若いころをよく知っており、元気なはつらつとした姿が心に残っていますし、親御さんたちよりも先に逝ったことを思うと胸が痛みます。今、最近知った帰天した皆さんを思いつつ、樋野先生の言葉をかみしめています。

先生は、患者さんのことをじっくり聞いたうえで、深い知恵を残してくれた先人たちや聖書の言葉を紡いで、先生の心の中で生きた言葉となったものを、患者さんの心の深いところに届けています。言霊という言い方があります。まさに言葉が魂を持ち、患者さんを深いところで支えることができるのだと思います。これから自分もそうなるかもしれませんし、生きている限りがんにかかる人たちと出会うなかで、先生からの知恵や力をよりどころにして歩みたいと強く思っています。

普段カウンセリングの講座などで「傾聴」ということを強調していますが、樋野先生はそれをされて、患者さんと信頼関係を作った上で、「ことばの処方箋」を届けておられます。

私にとっては「傾聴」を越えるということを、人を支えることや生きる意味や存在の意味、死について、考えることとともに今回改めて示されたといことです。これからも絶えず先生の処方箋をよりどころに、時に私の心を通した処方箋を用い、支援の働きができたらと考えています。

岐阜済美学院　宗教総主事／中部学院大学　宗教主事　高木　総平

中部学院大学
大学院／大学／短期大学部

発行：中部学院大学・中部学院大学短期大学部　宗教委員会